

21	西尾	一色東部小学校	タカハシ コウジ 氏名 高橋 浩司
分科会番号	6	分科会名	生活科教育

年長児との交流を通して、人と関わることのよさや自分の成長を感じる子の育成
—1年生活科「おいでん わたしたちの みずまつり」の実践を通して—

1 単元について

(1) 単元設定の理由

本学級の児童は、遊びへの興味関心が高い。通学路探検では、保育園に関心をもち、遊びに行きたいという思いをもった。年長児やお世話になった保育士と関わる機会を設けると、もっと年長児と遊びたいという思いを高めた。

そこで、本単元「おいでん わたしたちの みずまつり」を構想した。隣接する一色東部保育園の年長児との交流を軸に、「年長児に喜んでもらいたい」という願いの実現に向けて活動を進めた。友達と関わりながら、年長児の立場で準備に取り組み、招待した年長児らが喜ぶ姿を見たり、周囲の人から認められる場を設けたりすることで、人と関わることのよさを感じることができると考えた。また、互いの活動を認め合ったり、活動の振り返りを累積し、自分の変容をメタ認知したりすることで、年長児のために活動できた自分や友達のよさに気づき、自分の成長を実感することができると考えた。さらに、本学級の児童と年長児の双方にとって有益な交流活動にもなることを願った。

研究テーマを「年長児との交流を通して、人と関わることのよさや自分の成長を感じる子の育成」と設定し、実践に取り組んだ。

(2) めざす子どもの姿

- ・人と関わることのよさを感じる子や自分の成長を感じる子

(3) 研究の仮説と手立て

めざす子どもの姿に迫るために、研究の仮説とその手立てを次のように考えた。

【仮説1】「みずまつり」の開催に向け、子どもの思いや願いをもとにグループを編成し、年長児や保育士、友達と関わり、伝え合う場を設ければ、人と関わるよさを感じることができよう。

【手立て1】年長児に喜んでもらうことを目的に、グループで「みずまつり」の準備を進めることにより、友達とともに思考し、協働しながら思いや願いを実現できるようにする。

【手立て2】交流活動後、年長児や保育士から感想をもらったり、単元の最後に、「ほめほめ大会」を開き、自分や友達の活動を振り返ったり、伝え合ったりすることにより、満足感や達成感を味わうことができるようにする。

【仮説2】年長児を招待するための準備や交流の場面において、互いの活動のよさを認め合ったり、心の変容をメタ認知できるようにしたりすれば、自分の成長を感じることができよう。

【手立て3】活動や発表に対する思いや願いを可視化できる「鯛シール」を貼ることを通して、互いの活動のよさを認め合い、自信をもてるようにする。

【手立て4】ポートフォリオ型ワークシートを用いて、その日の自分の様子を表情（えがおメーター）で表して振り返り、その累積により、自分の成長を感じることができよう。

(4) 抽出児童Aにかける願い

児童Aは、生活科の学習において意欲が高い。日常生活では自信がなく、積極的に友達と関わるのが苦手だった。2学期の始業式でスピーチをしたことにより、自信をもち始めている。児童Aに対し、次のように願いをかけた。

- 「みずまつり」を開くという目的に向かってグループで活動することにより、友達との関わりを深め、友達と協力して活動することのよさを感じてほしい。
- 年長児のことを考えて「みずまつり」の準備を進めることにより、年長児の立場になって遊びや作り方を工夫し、やり遂げた自分や友達のよさに気付いてほしい。

(5) 単元構想と手立ての位置付け

手立てを踏まえ、以下のように単元構想を立て、実践に取り組んだ(資料1)。

資料1 単元構想「おいでん わたしたちの みずまつり」(14時間完了)						
学習課題 (丸数字は授業時数)						
出会う	(入口) 園庭で年長児と一緒に遊んだ体験を通して、年長児と もっと関わりたいという思いをもっている。 年長児に喜んでもらうために、自分たちができるところを考えよう①					
追究・探究する	年長さんを迎える準備をしよう④ ※手立て1 お店ごとに準備をして、年長さんに喜んでもらうにはどうしたらよいか考えよう⑥ ※手立て1、手立て3、手立て4					
	<table border="1"> <tr> <td><しゃぼん玉屋さん></td> <td><泥団子屋さん></td> </tr> <tr> <td><色水屋さん></td> <td><魚すくい屋さん></td> </tr> <tr> <td><水鉄砲屋さん></td> <td><水中めがね屋さん></td> </tr> </table>	<しゃぼん玉屋さん>	<泥団子屋さん>	<色水屋さん>	<魚すくい屋さん>	<水鉄砲屋さん>
<しゃぼん玉屋さん>	<泥団子屋さん>					
<色水屋さん>	<魚すくい屋さん>					
<水鉄砲屋さん>	<水中めがね屋さん>					
振り返る	年長さんを招待しよう② ※手立て2 ほめほめ大会をして、学習を振り返ろう① ※手立て2、手立て4 (出口) 年長児を招待し、水遊びをする活動を通して、人と関わることのよさや自分の成長を感じることができる。					
	<p>※手立て1</p> <ul style="list-style-type: none"> グループで「みずまつり」の準備を進める。 <p>※手立て2</p> <ul style="list-style-type: none"> 年長児や保育士から感想をもらったり、「ほめほめ大会」を開いたりする。 <p>※手立て3</p> <ul style="list-style-type: none"> 思いや願いを可視化できる「鯛シール」を貼り、互いの活動を認め合う。 <p>※手立て4</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の様子を表情(えがおメーター)で表して振り返る。 					

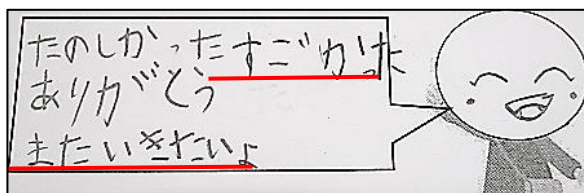
2 実践経過と考察

(1) 年長児に喜んでもらうために、自分たちができるところを考えよう(単元を貫く課題の設定)

保育園の園庭で遊んだ翌日、1年生と年長児が笑顔で一緒に遊んでいる写真を見せると、「一緒にかけっこできてよかった。」「年長さんが喜んでいて。」と発言した。児童Aも「年長さんと遊べてうれしい。」と発言した。年長児への意識が芽生えた様子から、「これからしたいことはありますか。」と問いかけた。すると、「今度は年長さんに来てもらいたい。」と答えた。さらに、「招待して何をしたいですか。」と問うと、ある児童が「この前、お祭りに行ってきたんだけど、すごく楽しかったから、みんなで屋台をやりたい。」と発言した。すると、「私もやりたい。」「お祭り楽しそう。」と他児も賛同した。「どのようなお店を開きたいですか。」と問うと、多くの児童が、生活科で行った水遊びをやりたいと言い、全員が賛同した。こうして、年長児にもっと喜んでもらえるように、様々な水を使った遊びのお店を開き、「みずまつり」を開くことに決まった。

(2) 年長さんを迎える準備をしよう(願いや思いの醸成)

年長児への思いをさらに高められるように、年長児がどのような様子になったら成功かということ話し合う場を設けた。すると「年長さんがとびきりの笑顔になったらいい」ということに決まった。そこで、「とびきりの笑顔」をイメージできるように、表情(以下「えがおメーター」)や年長児に言ってもらいたいコメントを記すことができるワークシートを用意した。すると、児童Aは、自分なりのとびきりの笑顔と、「すごかった。」「またいきたいよ。」など、言ってもらいたいコメントを記した(資料2)。



資料2 児童Aの年長児「えがおメーター」とコメント

次に、何の遊びをする店を開くかを決めるために、前単元で行った6つの水遊び(しゃぼん玉・泥団子・色水・魚すくい・水鉄砲・水中めがね)を体験する場を設けた。また、グループ決めは、児童の思いを大切にするために、人数制限を設けなかった。

児童Aはしゃぼん玉と泥団子で迷っていたが、「しゃぼん玉より泥団子の方が楽しいから泥団子にする。年長さんにも楽しんでほしいから。」と、泥団子屋さんに決めた。店長を決める話し合いでは、児童Bに譲る様子が見られた。まだまだ積極的になれず、自分の思いを我慢してしまう面があると感じた。

(3) 開店の準備をして、年長さんに喜んでもらうにはどうしたらよいか考えよう

① 年長児の立場に立って友達と協働して準備をしよう (手立て1の検証)

準備が始まり、それぞれのお店から「水風船がたくさんほしい」「色水を入れるコップがほしい」などの要望の声が上がったが、以前の作り方にとどまり、相手を意識した工夫は見られなかった。また、児童Aの泥団子屋さんは「つるつるにしたい」という思いをもって活動していたが、同じような泥団子がいくつもできて、「いっぱいできた」と満足していた。それは年長児が園で作るものとあまり変わらない出来栄であった。こうした現状を変えるために、年長児が行ったという水遊びや、縁日ごっことうまく接続できないかと考えた。

そこで、保育士へのインタビューを提案した。「下校後に、保育園へインタビューに行きたい人はいますか。」と聞くと、児童Aを含め数人の児童が手を挙げた。児童Aは、児童Eと水遊びのインタビューをすることになり、友達と練習を繰り返した。

2名の年長児の担任に、児童たちがお店をレベルアップできるような受け答えをしてほしいと事前に依頼しておいた。児童Aの元担任だったH先生には水遊びについて、I先生には縁日ごっこについて話してもらうこととした。当日、児童たちは喜んでインタビューに出かけた。インタビュー後、H先生から「Aちゃん、頑張ってるね。年長さん、『みずまつり』を楽しみにしているからね。」と励まされると、「うん、頑張る。」と前向きな気持ちになり、活動への意欲を高めたようであった。「H先生とまた話せてよかった。」とつぶやくA児の姿もあり、お世話になった人と再び関わることのよさを感じていた様子もうかがえた。

次の日、教室でインタビューの様子を動画で見せた(資料3)。児童たちは、「協力して」というI先生の言葉を受け、「私たちもお店のみんなと協力してやろう」と、協働への意欲を高めた。また、「年長さんがやったことのない遊びがいいな。」というH先生の言葉を受け、年長児が経験している4つの水遊び(しゃぼん玉・泥団子・色水・水鉄砲)をもっと工夫し、驚かせたいという気持ちをもった。

他の児童も、年長児の行った水遊びの様子を詳しく知りたい様子であったため、年長児の水遊びの写真を提示した。すると、しゃぼん玉屋さんの児童Fは「しゃぼん玉はストローで吹いているから、他の道具を使ったほうがいいね。」と道具に着目した。水鉄砲屋さんの児童Jは「的が当たりやすそうなところにあるから、的の場所を変えるといいかも。」と遊び方に着目した。しかし、児童Aは年長児の泥団子の写真を見て、「私たちが作るものとほとんど変わらないから喜んでくれないよ。」と気付き、「どうしよう。」と悩み始めた。色水屋さんの児童も同様であった。

そこで、児童らの悩みを解消するために、水遊びの本を図書館から借り、教室に「みずまつりヒントコーナー」を設置した。児童Aは、すぐに興味をもち、泥団子の遊び方が載っている本を熱心に読んだ。そして、「この『宝石泥団子』(色を塗った泥団子)をやってみたいけれど、1人じゃ難しそう。」と本を見せながら、担任に話してきた。「1人でやるのではなくて、4人で協力したらどうかな。」と助言すると、「そうだね。みんなでやればできるかも。」と言い、児童Bと児童Cに「これやってみない。」と「宝石泥団子」のページを見せた。すると、児童Bが「まず、つるつるのをいっぱい作ってから色を塗るといいんじゃない。」と言い、「そうだね。みんなで協力して、まずつるつるの泥団子を作ろう。」と児童Aは答えた。

同じ目的に向かうグループで準備を進めることにより、友達とお店のパワーアップに向けての方向性が決まり、思いや願いの実現に向け協働して行っていこうと動き出すことができたと考える。

② 活動を認め合いながら、パワーアップしていこう (手立て1、手立て3の検証)

「みずまつり」の準備を進める上で、毎時間の自分の活動を「えがおメーター」で表し、どうしてその顔になったかを記して、振り返りを累積し、変容や成長を、客観的に捉えることができるようにした。準備を始めた頃は、笑顔をかく児童は少なかったが、準備を進めるにつれ、笑顔をかく児童が増えていった。児童Aも最初の2回は悲しい表情をかき、「けんかした。」「作ったのに壊した。」と記述していた。しかし、保育士のインタビューによって、協力して行おうという気持ちを高めた後の3回目の準備では、微笑みに変わり、「つるつるにできて

児童E:保育園ではどんな水遊びをしましたか。
H先生:しゃぼん玉と泥団子と色水と水鉄砲です。
児童E:やってほしい水遊びは何ですか。
H先生:年長さんがやったことない遊びがいいな。
児童F:年長さんががんばったことは何ですか。
I先生:協力して商品やお店の看板を作りました。

資料3 保育者へのインタビュー (9/26)

たのしかった。」「またやりたい。」と変容が見られた(資料4)。「今日は悲しい顔じゃないね。」と話しかけると、前回までのものと見比べて、「うん、初めて協力してやれたから。」と答えた。自分の様子を表情で表し、累積したことで俯瞰的に活動を振り返ることができ、その違いに気付くことができたと考えられる。

しかし、児童Aがめざしているときりの笑顔ではなかったことを問うと、「うん、だって『鯛シール』を全然貼ってもらえなかったから。」と答えた。他のお店の友達から認めってもらえなかったことに、満足感を得ていない気持ちが伝わってきた。

「鯛シール」とは、友達の活動や発表を認め、自分もやってみたいという思いを他者に伝えることができるものである。伝えることが苦手な児童も、友達のよさを伝えることができる利点がある。入学当初から活用しており、この单元でも取り入れていた。

毎時間、それぞれのお店の活動の願いを板書で示しておき、活動後、その成果を写真や動画、実物で披露した。そして、自分が年長児だったらどのお店に1番行きたいかを「鯛シール」で表し、その理由を発表する流れとした。1回目・2回目の準備(9/19、26)では、どのお店も同じぐらいの「鯛シール」が貼られていたが、3回目の準備(9/29)では色水屋さんに「鯛シール」の多くが集まった。色水屋さんは2回目まではなかなかうまく色水を作ることができていなかったが、「みずまつりヒントコーナー」で見つけた本の内容を参考に、たくさんの種類の色水を3回目で作った。それを見た児童たちは、「いろいろな色できれい。」などと言って「鯛シール」を貼った。児童A

	ほんかしてたらめんどくさかった。 つぎはうれしくしたい。
	つぎはにこまかくしたい。 とほちがらくつきのにこまかくしたい。
	ほんかして(めんどくさ)なしかつた。 つぎににこまかくしたい。 つるつるにできたいから。 たのしかった。 またやりたいとおもった。

資料4 児童Aのワークシート (9/19・26・29)

も「Eさんと同じで、きれいだからやってみよう。」と自分の言葉を添えて色水屋さんのよさを認めることができた(資料5)。

9/29 おいぜん みずまつり
④ねんちようさんとときりのえがおにしよう。

みずでっぼう	さかなすくい	どろだんご	すいちゅうめがね	しゃぼんだま	いろみず
たかくとほしたい	さかなをふやしたい	つるつるにしたい	たぐひんぶをしたい	おあきのをスリたい	いろをふやしたい
いちはちがたい	おあきのつりた	さあつた	いっばいすだ	たのしそう	うまくていい きれいでめいた いっばいでたのしそう いろはちがきれい

資料5 板書記録 (9/29)

児童Aは、「鯛シール」をいっぱい貼ってもらいたいという思いをもち、「宝石泥団子」の制作に取り組んでいた。「宝石泥団子」はつるつるの泥団子に絵の具で色を着けていくものだが、つるつるの泥団子がまだ少ないからと、児童B・Cと3人で休み時間も熱心に泥団子を作っていた。3人に、休み時間に遊ばなくてもよいのかと尋ねると、「うん。だって年長さん全員に渡したいからいっぱい作らなきゃ。」と年長児のことを考えた言葉が返ってきた。一方児童Dは、「休み時間は遊びたいからやらない。」と言って制作に加わらなかった。しかし、泥団子屋さんの3人が休み時間も制作していることを学級全体に広めると、水中めがね屋さんの児童たちが「私たちが年長さんの人数分できてないから休み時間に作ろう。」と制作を始めた。児童Dはこうした姿に感化され、放課に泥団子を一緒に制作するようになった。児童Aに「4人そろったね。」と言うと、「うん、うれしい。お店のみんなでやりたかったから。」と笑顔で答えた。

4回目の準備では、泥団子屋さんは「宝石泥団子」の制作に

10/5 おいぜん みずまつり
④ねんちようさんとときりのえがおにしよう。


みずでっぼう	さかなすくい	どろだんご	すいちゅうめがね	しゃぼんだま	いろみず
たかくとほしたい	ほんものみたいでした	ほうせきみたいでした	ねびさくかえりた	きれいなたいのがりた	2つでめかしたのをスリたい
	かわいい	たのしそう いっばい きれい ほうせきみたい	めいめい	やめたい おあきのをすだ	やめたい つくってみたい

資料6 板書記録 (10/5)

取りかかった。児童Aは、児童Dに「水をたくさんつける方が宝石にきれいに色が着くよ。」と助言した。児童Dは、「ほんとだ。」と聞き入れ、協働的に取り組む姿が見られた。4人がそろったことを喜ぶ姿や、自信のなかった児童Aが、自ら児童Dに関わる様子から、思いや願いを実現するために、グループで思考して「みずまつり」の準備を進めたことは、協働のよさを感じるために有効であったと考える。

活動を終え、それぞれのお店が学級全体に活動の成果を披露した。泥団子屋さんは、制作した「宝石泥団子」の実物を見せた。その後で、「鯛シール」を貼り合った。前回同様に、色水屋さんに「鯛シール」が1番多く貼られたが、泥団子屋さんと同じくらい多くの「鯛シール」が貼られた（資料6）。


それを見て、泥団子屋さんの児童たちは満面の笑みを浮かべた。また、資料5と資料6を比べると、明らかに泥団子屋さんの「鯛シール」の数が増えていた。思いや願いを可視化できる「鯛シール」を取り入れたことにより、周囲の人から認めてもらえたことを実感し、自信につながったと考えられる。児童Aは「えがおメーター」にはじめて笑顔をかき、「模様の泥団子を作れて楽しかった。」（資料7）と記述した。こうした様子から、「鯛シール」は、互いの活動を認め合い、自信をもてるようにするために有効であったと考える。

10/5		もよのどろだんごをつけて でいけんごがかわいた。 いろみかいたごがかわいた。
資料7 児童Aのワークシート (10/5)		

（4）年長さんを招待しよう（手立て2の検証）

準備を終えたので、年長児に合った遊びや作り方になっているかを学級全体で確かめ合うために、1年生役（お店）と年長児役（お客さん）に分かれて「お試し会」を開いた。

年長児役の子Aは、魚すくい屋さんで「年長さんにはポイは難しいけど、手ならすぐえる。」とつぶやいた。また、1年生役になると、「いらっしやいませ。」と大きな声で呼び込んだ。「泥団子の種類がいろいろあるから、年長さんは選ぶのが楽しいと思う。」と友達に言ってもらい、うれしそうであった。しかし、泥団子を取るときにひっかかって、泥団子が欠けてしまうことがあった。「年長さんに選んでもらった後、袋に入れるのは1年生がやった方がいい。」とお客さん役の友達から助言を受けた。児童Aたちは、すぐに改善した。その日の「えがおメーター」には笑顔をかき、「またお客さんを呼びたい。」と記述した（資料8）。


10/23		いろんないせがでてたのしめた さかなすいさんかたのしめた またお客さんをよんでやりたい
資料8 児童Aのワークシート (10/23)		

招待当日は、和気あいあいとした雰囲気、笑顔があふれていた。児童たちが年長児に寄り添い、優しく声をかける姿が随所で見られた。児童Aは、年長児や保育士におすすめの泥団子を紹介したり、泥団子を丁寧に袋に入れたりして、うれしそうに年長児や保育士と接していた（写真1）。



写真1 年長児や保育者と接する児童A（右手前）

年長児たちも、「すぐえてよかった。」「もっと水をかけたい。」「もらったもの大切にすね。」などと感想を言いながら、楽しんでいた。「みずまつり」が終わると、H先生から感想が届いた。H先生には、児童たちの成長の評価を依頼しておいたため、児童たちが年中児や年長児の時と比較してできるようになったことを大いに褒めてもらい、さらに「年長さんは小学校がとても楽しみになりました。また1年生と一緒に活動したいです。」と言ってもらえた。児童たちは、H先生の感想を真剣に聞き、涙ぐむ姿も見られた。年長児や保育士の感想から、今回の「みずまつり」は小学校側だけでなく、園児にとってもよい交流ができたと考えられる。

10/31		すくいのしめた。 またやりたい。 ぬんちんさんやよろこばせられてうれしかった。 ぬんちんさんがかわいかった。
資料9 児童Aのワークシート (10/31)		

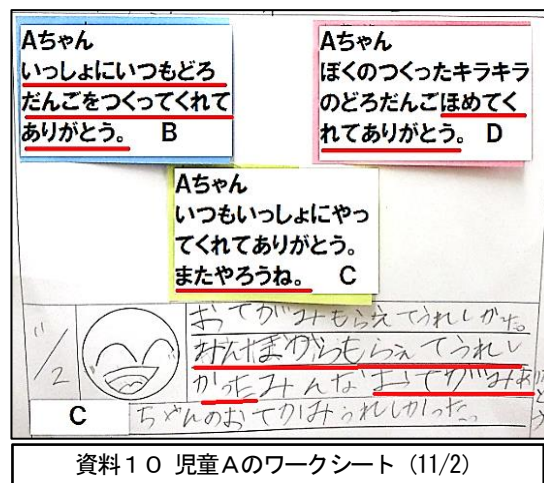
振り返りの前に、年長児の笑顔の写真を提示し、感想を紹介した。児童Aは「とびきりの笑顔になってもらえし、H先生に褒められてよかった。」と満足感を感じさせる言葉をつぶやいた。そして、「えがおメーター」に、お試し会のときよりもパワーアップした笑顔をかき、「年長さんを喜ばせられてうれしかった。」と記述した（資料9）。

年長児や保育士から感想をもらったことは、満足感や達成感を味わうために有効であったと考える。

(5) 「ほめほめ大会」をして、学習を振り返ろう（手立て2、手立て4の検証）

児童たちは準備段階で、他のお店の活動を認め、褒め合っていた。しかし、自分のお店の友達を認め合うことはまだ不十分であった。そこで、「みずまつり」の2日後、「ほめほめ大会」と称し、同じお店の友達のよさを伝え合う場を設けた。まず、お店の活動の様子を、準備段階から写真で振り返った。そして、同じお店の友達への思いを付箋に書いて交換し合った。

もらった付箋を読んだ児童たちは「えがおメーター」をかき、「うれしい。」「ありがとう。」「うれしそうにつぶやき、教室全体が温かい雰囲気になった。児童Aは、「教えてくれてありがとう。」「最後まで片付けしてくれてありがとう。」など友達への感謝を記した。そして、友達からもらった「いつも一緒に泥団子を作ってくれてありがとう。」「褒めてくれてありがとう。」「またやろうね。」などと書かれた付箋を読み、「えがおメーター」にとびきりの笑顔をかき、「みんなからもらえてうれしかった。」「お手紙ありがとう。」と記述した（資料10）。教師が「これまでの笑顔と違うね。」と声をかけると、今までの「えがおメーター」と見比べて、「だってすごくうれしいんだもん。やってよかった。また友達と協力して年長さんを喜ばせたい。」と答えた。



「えがおメーター」の笑顔が、これまでで一番のとびきりの笑顔であったことから、友達に認められ、満足感と達成感が高まった様子がうかがえる。活動を振り返り、改めて友達と互いを認め合う「ほめほめ大会」は、満足感や達成感を味わう手立てとして有効であったと考える。

また、こうした変容は、累積してきた「えがおメーター」を見たことにより表出したものと考えられる。よって、ポートフォリオ型ワークシートを用いたことは、自分の変容を客観的に見ることができ、自分の成長を感じさせるために有効であったと考える。

3 成果と課題

(1) 成果

「年長さんをとびきりの笑顔にしたい。」という児童の思いや願いを大切に、年長児の立場に立って交流活動を展開できるよう細部にわたって支援を行った。これにより、児童は主体的に活動し、年長児や保育士、友達との交流を経て、めざす子供の姿に近づいていった。自分の活動を多くの人から認められることが、児童の意欲を引き出し、思いや願いを更新させ、変容する大きな力となったと考える。

また、「年長さんは小学校がとても楽しみになりました。」という保育士の言葉から、年長児にとっても、有益な交流となり、年長児から1年生への架け橋となる良好な関係を築くことができたといえる。

今後も、児童の身近な人々との交流活動を意図的に設定し、生活科でめざすべき資質能力の育成を図っていきたい。

(2) 課題

ポートフォリオ型ワークシートを累積し、客観的に自分の成長を感じることができるようにした。「えがおメーター」の笑顔は着実に変容していったため、満足感や達成感をうかがい知ることができた。

さらに、ポートフォリオの累積を児童に見直すよう促し、成長を見取ったり、ほめほめ大会において友達だけでなく、自分を褒める活動を取り入れたりし、児童が自らの成長を感じることができるようなはたらきかけをすることで、この手立てをより確かなものにできたと考える。

(3) 研究主題に向けて

人と関わることのよさを理解して協働したり、自分の成長を客観的に捉えて今後に生かそうとしたりする力は、将来にわたって自分を支える糧となると考える。本研究を通して、こうした力を、新たな価値として培うことができたと確信している。学校生活の中で発揮する場を設けながら定着を図り、発達段階に伴う形で、さらに培うことができるように研究を継続していく。